

# 『縄文講座 北の古代文字世界』

平成12年3月11日(土)

13:00~

青森県総合社会教育センター 大研修室

## 資料集

- 北の古代文字世界 土器に書かれた「夫」は、はたして「夷」か！

国立歴史民俗博物館 平川 南 氏

- 古代の北海道・東北ど文字・記号のある土器・瓦

国学院大學 鈴木 靖民 氏

- 「夫」字窯(墨)書土器について

法政大学 小口 雄史 氏

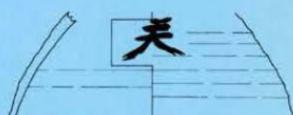


- 札幌市 サクシユコトニ川遺跡の「夫」について

七飯町教育委員会 横山 英介 氏

- 野木遺跡から出土した墨書き土器「夫」の解釈をめぐって

浪岡町史編纂室 工藤 清春 氏



## 基調講演

北の古代文字世界 土器に書かれた「夫」ははたして「夷」か！

国立歴史民俗博物館 平川 南

1, 「夷」 = 「夷」という解釈

2, 「夫」 = 「夷」説に対する疑問

3, 列島における墨書き土器—共通文字・共通字形・文字と記号・祭祀行為と文字

4, 「神奉」および“奉”と考えられる字形の共存例（千葉県内出土例）

5, 「夫」字を複数出土した遺跡—青森市野木遺跡

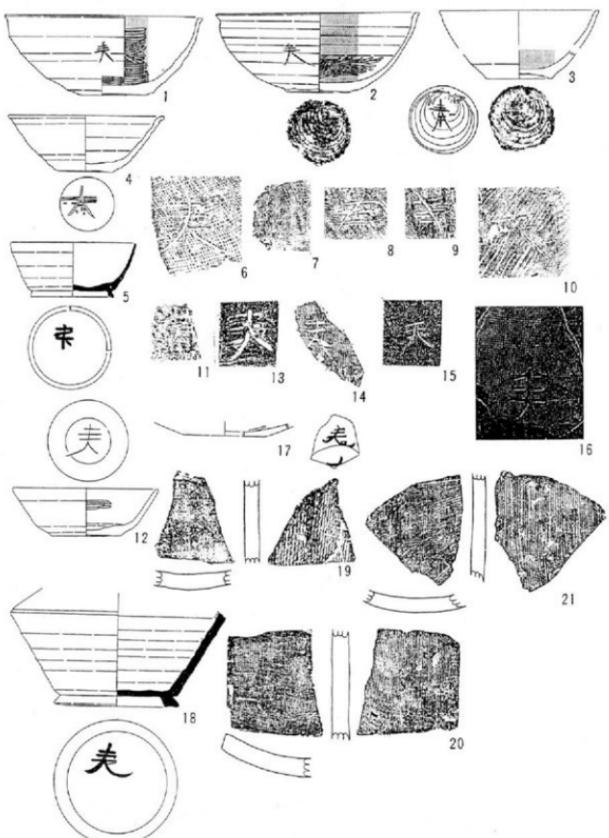
6, 「夷」と「狄」

7, むすびにかえて

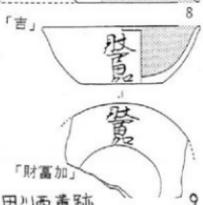
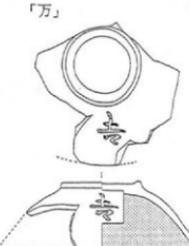
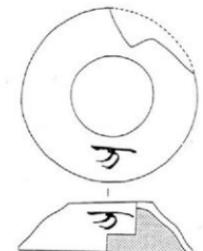
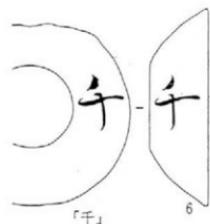
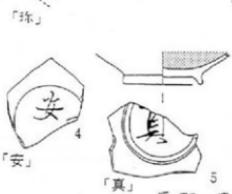
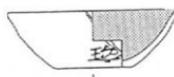
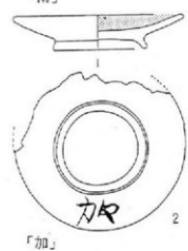
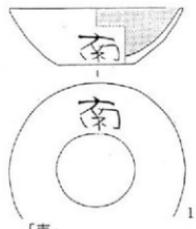
- ①サクシユコトニ川道路（第3図1）  
[所在地] 北海道札幌市北区北17条西13北海道大学構内 [時期] 9世纪（奈文文化前期）
- ②大川遺跡（第3図2・3）  
[所在地] 北海道余市郡余市町大川1～3丁目 [時期] 7世纪～10世纪
- ③魁沢城跡  
[所在地] 岩手県水沢市佐倉河字渋田はか [時期] 平安時代
- ④湯ノ沢下遺跡（第3図4）  
[所在地] 秋田市四ツ小屋東戸松本字湯ノ沢 [時期] 9世纪後葉～10世纪前葉
- ⑤払田遺跡（第3図5）  
[所在地] 秋田県仙北郡仙北町払田はか [時期] 9～10世纪
- ⑥佐渡国分寺（第3図5～11）  
[所在地] 新潟県佐渡郡真野町大字国分寺字経ヶ峯 [時期] 8～9世纪
- ⑦八幡橋東造跡（第3図12）  
[所在地] 栃木県小山市大字中久喜 [時期] 8～9世纪
- ⑧上野国分寺（第3図13～16）  
[所在地] 群馬県群馬郡群馬町大字東国分、同引間、前橋市元松社町 [時期] 8世纪～11世纪
- ⑨狐原遺跡（第3図17）  
[所在地] 山梨県東八代郡一宮町竹原田字川原田 [時期] 平安時代
- ⑩平城宮・平城京（第3図18・19）  
[所在地] 奈良市佐紀町・三条大路一丁目、大和郡市九条町他 [時期] 8世纪
- ⑪音如ヶ谷瓦窯・吹屋西瓦窯（第3図20・21）  
[所在地] 京都府相楽郡木津町音如ヶ谷、奈良市吹屋町 [時期] 8世纪（音如ヶ谷……745年の平城遷都以降、吹屋西……720～730年代）

戸根貴之「古代文字資料にみる蝦夷」

『古代』第106号 披刷（1999年3月）



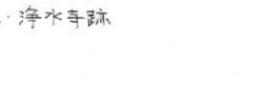
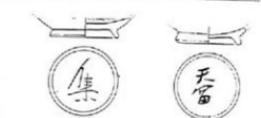
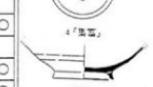
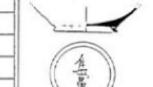
第3図 「夫」字出土資料（縮尺は土器4、瓦14、16は絶尺なし）



富	吉	得	福	生	財	万	人	大	田
富	○	○	○	○	○	○	○	○	○
吉		○	○	○	○	○	○	○	○
得			○	○	○	○	○	○	○
福				○	○	○	○	○	○
生				○	○	○	○	○	○
財					○	○	○	○	○
万						○	○	○	○
人							○	○	○
大								○	○
田									○
西									○
立									○
力									○
天									○
来							○	○	
集								○	
合								○	
足								○	

長野・吉田川西遺跡

## 石川県・海水寺跡



福島・蓬中久保遺跡

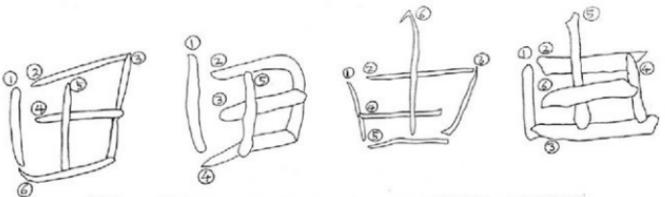
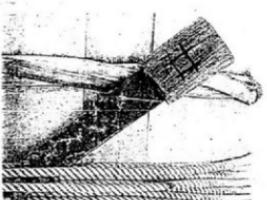


図3 「田」または「由」の篆體模式図【島根県玉湯町蛇喰遺跡 ヘラ書き須恵器】



伊勢忠摩の海女の纏ノミに印された「ヰ」の符号

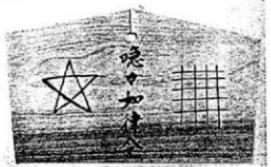
鶴鉢織の折持札にみえる「ヰ」と「龍」の符号  
(三重県上野市光明寺)

図3b 「ヰ 小田万昌」(千葉・作畠遺跡)

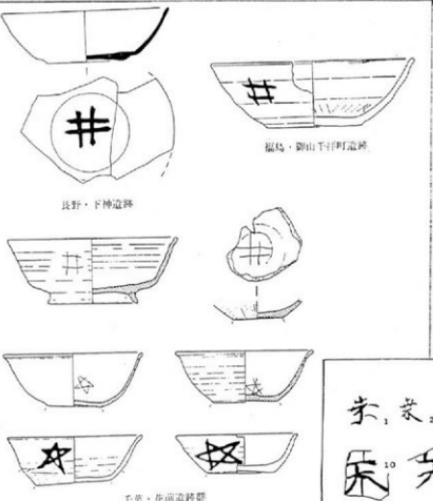
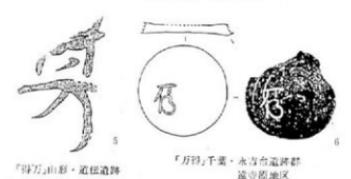


図4 「ヰ」の字形

1・2 「私羽」千葉・公津原道路  
Loc. 15遺跡

3・4 「ヰ」 福島・上山田道路

5 「得万」千葉・水吉古道跡群  
道守跡地区

図1 「ヰ」の字形

四つの方体=中国の木簡(1)「野夫」(2)「大父」(3)「子」(4)

居延簡375 495-4B

13

新居延簡

13

居延簡375 495-4B

13

居延簡375 495-4B

13

武威簡簡  
61

13

武威簡簡  
67

13

居延簡410 341-2

ヰ

131

ヰ<sub>1</sub> 茉<sub>2</sub> 衣<sub>3</sub> 世<sub>4</sub> 朧<sub>5</sub> 朧<sub>6</sub> 朧<sub>7</sub> 朧<sub>8</sub> 朧<sub>9</sub> 朧<sub>10</sub> 朧<sub>11</sub> 朧<sub>12</sub> 朧<sub>13</sub> 朧<sub>14</sub> 朧<sub>15</sub> 朧<sub>16</sub> 朧<sub>17</sub> 朧<sub>18</sub>



図2 「朧=ヰ」の字形群と字形変化【山形県熊野田遺跡】

卷之四

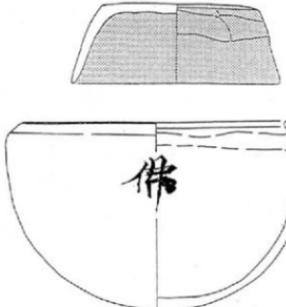


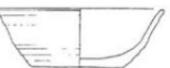
図 1 千葉県鳴神山遺跡の墨書き器



子子磨  
島根いわき市荒田日条里道跡



○千葉県八千代市白塚前流跡  
外腹体部 黒墨入面  
「丈部人足召代」  
○千葉県芝山町庄作道跡 →  
内腹 錦唐人面  
外腹体部 「丈部人足召代国脚夢」



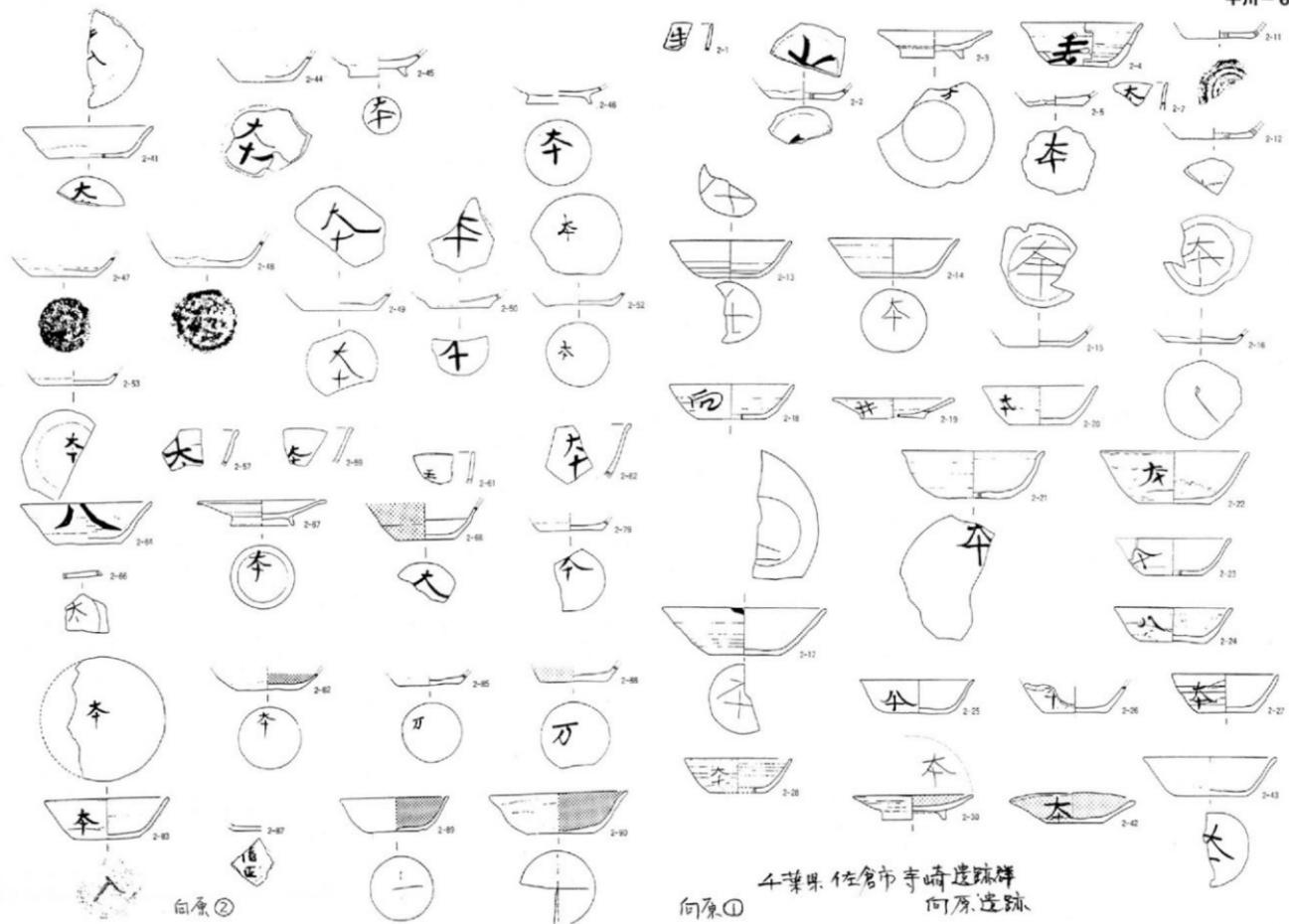
神國寿 次良  
希真

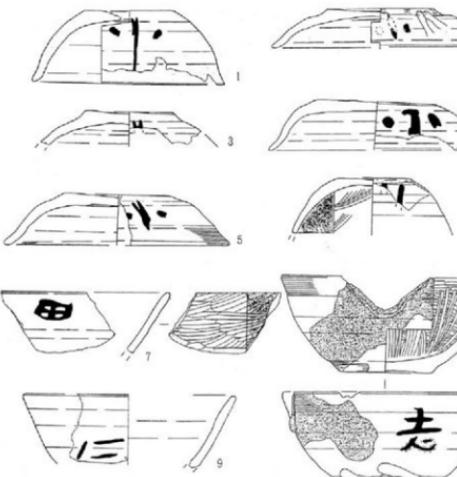
官の勢力を伏りて、非に政を為し、黙然と隠る。下巻三十五  
山壁の天蓋のみせで、筑紫の肥前の閑松園の部の人、火薙の虎、眞  
然に死して魔魔の間に坐る。時に玉枕ふるべし。死則に合はざる故に、更に敵を殺す。謂る所見聞れば、大體の中に益の如き皆有り。(平  
野)本稿における「田舎裏垣記」の訓読みは、岩波新書・日本古典文庫  
大系本などによる。

の精神論に関する説話の中で、実界に免まなかったとした怨恨が生・頭をなす「連玉王の鬼」は、「連はらが故に、唯我を食す」と云ふ。鬼は、齋戒も「放髪も真き者なし」。彼の人を召す事に」と云う。(この説話の中では、でも、「連は「免」者」「口」) ところがそれを深く問題しながら、いつまでも「連は「免」者」と云う言葉がそれなりに残る。

成れど、新食を見だして、隠れて就きて、最も卑く、衣百姓にはうつて、其の腰脇に、  
間のその人を「か」といふ。衣百姓は皆はくらむの腰脇に、  
都に同じ姓の衣百姓「」といふ。衣百姓をハ、鶴の頭の衣百姓の家に住みて、而して、即ち那の腰脇に、一だ腰を出して、腰に打ち  
打ひ、腰を出せ。か。彼の三田の部屋が、ほんとうに腰を出せたのである。

間魔王の後の妻、召さる人の妻を受けて、恩を報する様、中身第一回目



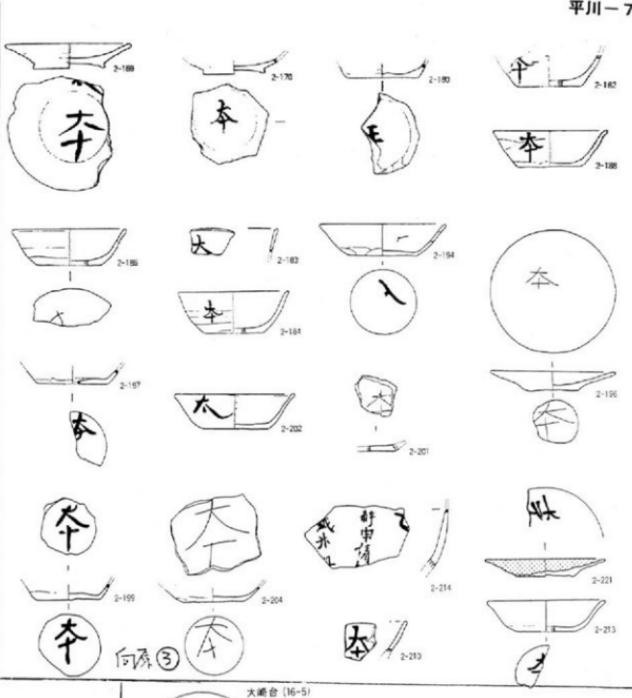


青森県大庭町

伊勢原(2)(3)  
遺跡

墨書き土器集成図

0 10cm



大漁台 (16-5)

		所蔵道路名	種別	主な時代	主な遺物	主な遺物
野尻(3)道路	落					
平安時代	建物跡	16軒	土師器 (壺、环、皿、耳皿、球形器、小型)	縄文時代	溝状住居跡 5基	縄文土器破片
	整穴住居跡	1軒	須恵器 (大甕、長颈甕、壺、环)	平安時代	溝穴住居跡 7軒	土師器
	掘立柱建物跡	2棟	須恵器 (大甕、長颈甕、壺、环)		掘立柱建物跡 2棟	須恵器
	整穴遺構	1軒	墨書き土器		整穴遺構 5軒	ニニチュア土器 墨書き土器
土坑	20基	土製品 (土器)			土製品 (土器、其形、土玉)	
佛土造供	1基	鉄製品 (鉄刀、環、釘等)			佛土造供 4基	鉄製品 (防護車、釘、等)
溝跡	12条	鉄鋤			溝跡 6条	
	円形周溝	8基			円形周溝 22基	石製品 (砥石)
	井戸跡	1基				鍬鋸、羽口
(道路状遺構 1条)						計段ボール箱30箱
		計段ボール箱40箱				

寺崎・一本松 (16-4)

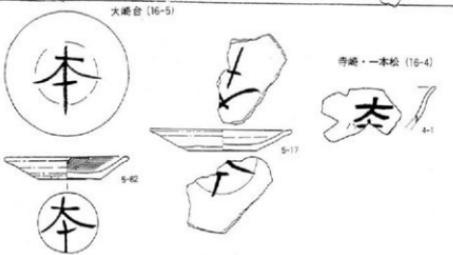
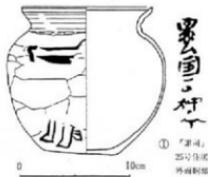




図5 千葉県庄作遺跡の墨書き土器  
46号住居跡・土師器环  
外面部印「×秋人鬼神奉達 上施×」  
(千葉・庄作遺跡)



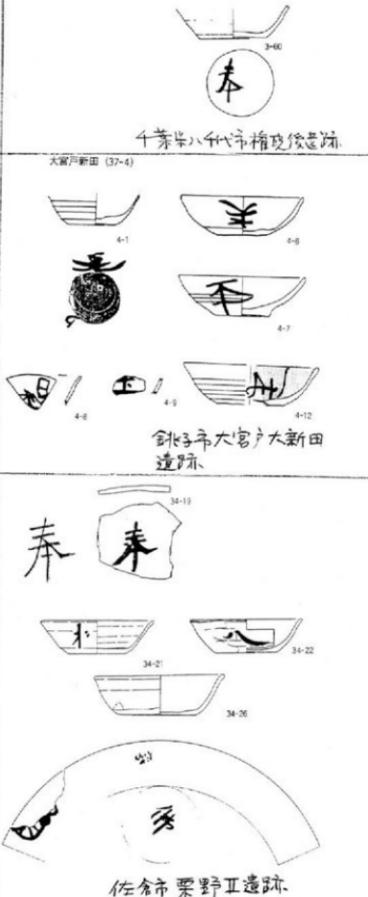
図6 千葉県庄作遺跡の墨書き土器  
67号住居跡・土師器环  
外面部印「人面墨書き  
外面部印「手」  
内面「墨書き奉」



①「奉」への移行を示す墨書き土器  
55号住居跡・土師器环  
外面部印「人面墨書き」「奉」(千葉・庄作)

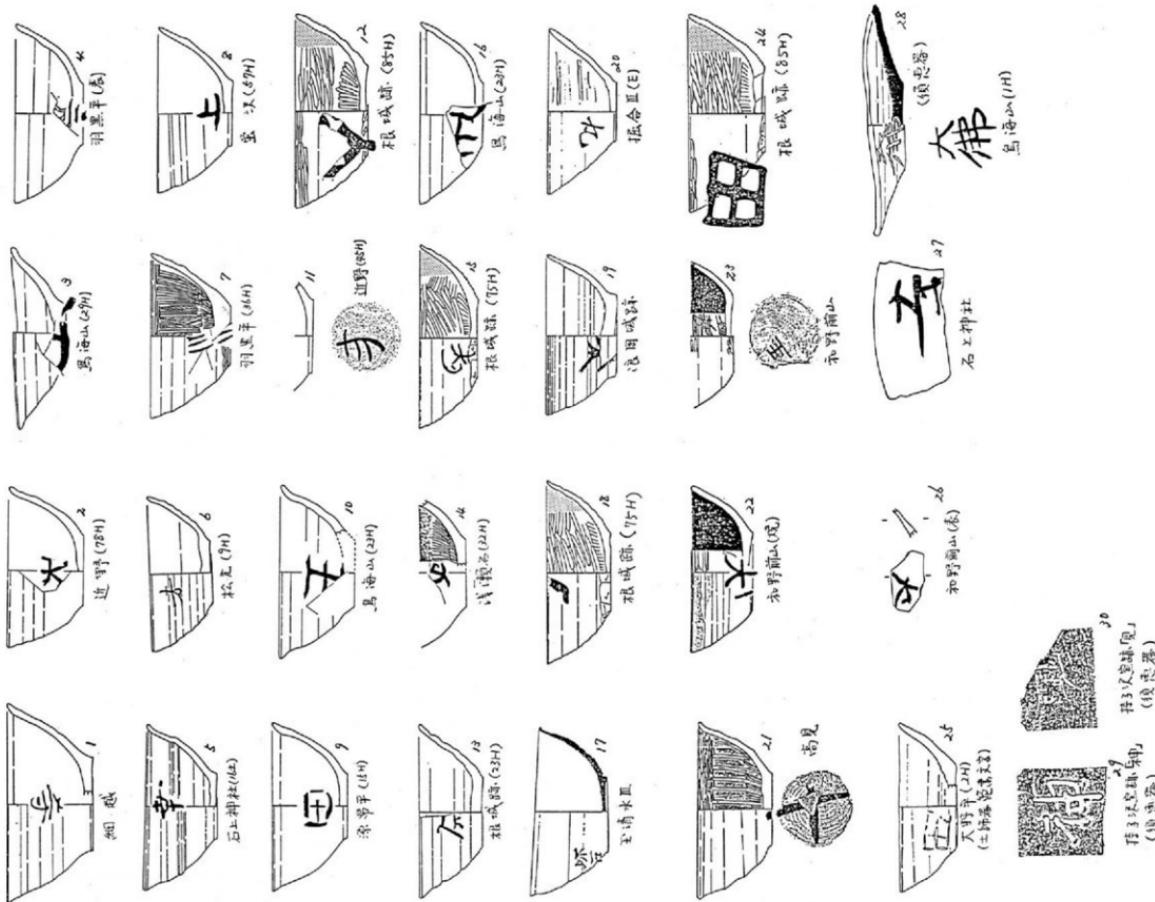


山武郡芝山町庄作遺跡  
(千葉・庄作)



佐倉市栗野Ⅱ遺跡

青森県出土の墨書き師器・絵書き器実測図一覧



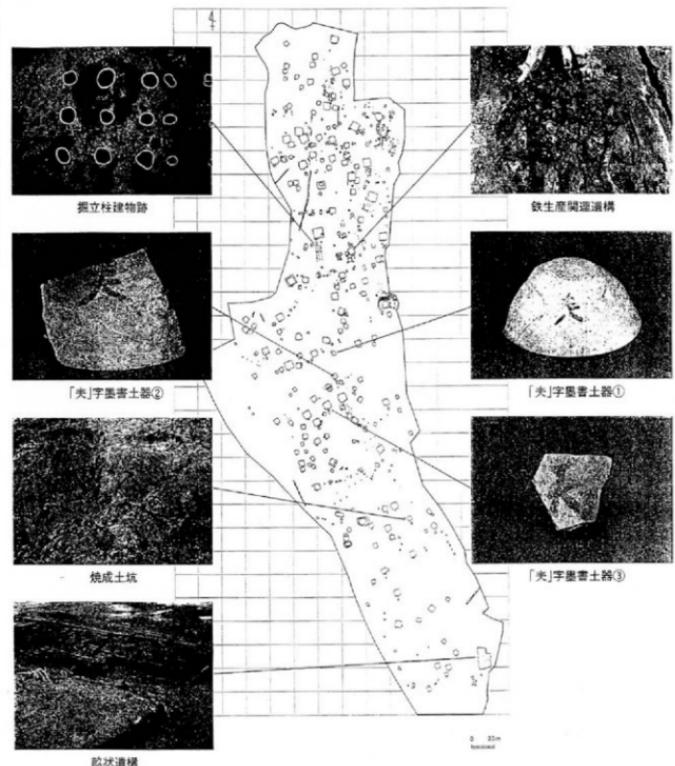


野木遺跡調査区遠景

## 今年度の調査から（野木遺跡）

青森市教育委員会で実施した野木遺跡の発掘調査は、昨年度の発掘調査に引き続き約45,900㎡について、平成10年4月20日から同年11月6日まで実施しました。

調査の結果、平安時代を中心とする竪穴式住居跡114軒、竪穴造構14基、土坑171基、鉄生産関連構5基などの遺構が見つかりました。また、平安時代の土器を中心とした遺物は、段ボール箱で約140箱分出土しました。





青森市  
野木遺跡



千葉県八千代市  
村上辻の内遺跡出土土器の裏面



「夫」と書かれた墨書き土器



秋田市湯ノ沢下遺跡



「夫」の刻字のある土器(土器器) 札幌市サクシュコトニ川遺跡



「夫」の刻字のある土器(土器器) 札幌市サクシュコトニ川遺跡

奈良県 歌姫西瓦窯等出土の籠書き瓦

秋葉仙人「秋葉仙人」、「秋葉木簡」「秋葉」  
五九号木簡に海藻類を示す「秋葉」といふ物がみられる。  
「秋葉」は、文字通り「秋葉」に対する解釈が考へられる。  
と謂ふて、「秋葉」とする解釈が考へられる。  
「昆布」は、「昆布類綱目」、「一名昆布類女」とあり、  
「えびすめ」と訓まれていたことが知られる。実際、「延喜式」(民部下)  
に諸國交趾等物料として陳奏から昆布を貢献することが定められている。  
陸奥およびそれ以北を主産地とする海藻類であったため、「えびすめ」と  
よばれたのである。

「伏見」を「えひすめ（昆布）」とした場合、昆布が羽田國で産出されないという点が問題となる。昆布は、羽都新造至主産地として、北海道など、本宮城県七ヶ浜町沿岸までに分布しており、日本海側には分布していない。太平洋側のみで生れる昆布を「伏見」と読みしたと考えることはやはり間違っている。

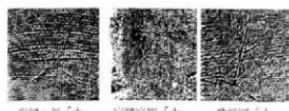
一方で「秋」の用語に着目する。「津経付注」(『日本後記』弘)五年(八一四)十一月(正月)、「舊唐書」(『日本後記』訳)五世(八一〇)十一月(正月)、「日本書紀」(『日本後記』訳)五世(八一〇)十一月(正月)、「日本書紀」貞觀五年(八九三)閏五月(正月)など、津經付注によれば、この時期は「秋」の時季が使われていたことが知られている。また、「新日本本紀」(『日本後記』)を龜七年(七十六)五月戊子朔(一出前田敏毅校註)

以上のように「秋」の意味を域と、日本海側のみならず、津浦以北や  
太平洋側でも「秋」の意味をもつてゐるらしい。「秋味」=昆布の可憐性  
も十分理解するといふことが出来る。但設置では、「いずれとも官印しがたいが、  
「秋」の用例を考えていく際の貴重な資料となる」といふことに間違いがないであら  
う。

かが逆説しないで、同様の意見がある。少なくとも可能性が指摘されている（鶴田英介「したたかの歴史」が、『支那通史』は「毛利源平」である）。『支那通史』によれば、『夷夷と倭夷』（貢北古代史の研究）一九八〇）が、一時期毛利氏に属したとされる。『毛利和歌』を指して「伏」と称していた可能性がある。

五所川原市埋蔵文化財調査報告書 第21集  
犬走須恵器窯跡発掘調査報告書

「齋」→「夾」→「夬」→「大



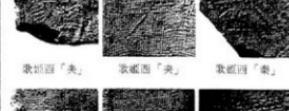
晋如ヶ答「大」 宮蹲庭园「大」 歌麿园「大」



**THE JOURNAL OF CLIMATE** (ISSN 0890-3398) is published monthly by American Meteorological Society.



This block contains four small, dark, rectangular artifacts or debris pieces, possibly from a film strip or a piece of equipment.



卷之三



10. *Leucania* *luteola* (Hufnagel) (Plate 10)



卷之三

## 犬走塞における算記号の各種

	大	天	未	否	*	X	-	+	否	合
本级医 患者	46	11	1(1)	7(1)	1(2)	17(19)	7(1)	17	121	
33%   9.6%	9.6%	3.2%	0.8%	6.6%	1.7%	22.5%	6.2%	14.9%		
年龄+性别	7	2	(2)			13(6)	4			37
18.9%   5.4%	5.4%	8.4%				51.4%	10.8%	8.1%		
医 疗 费	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$		10(4)		(1)	(3)			30

図表1は、瓦書きの出土地點を示す。図表1内に括弧で示すものは、複数回の発見である。但し比率はこれを含めて算出した。

## 古代の北海道・東北と文字・記号のある土器・瓦

國學院大學 鈴木 靖民

### 1. 檻文社会と古代国家

#### a 蝦夷の居地・集団

- 渡島、津軽・津司（720）、渟代（能代）、頬田（秋田）、出羽、沼垂、陸奥、越
- b 王權との支配  
蝦夷の交流と支配  
蝦夷の泊瀬川での服属の盟約説話（518）・・・王權との接觸の始まり  
阿倍比羅夫らの北航（658～660）・・・「蝦夷」の地域・集団による區別  
飛鳥守西の広場での服属儀礼・擁応（624～） 「朝貢」・・・774年まで  
飛鳥許宮・平城宮での朝貢と元日朝賀・陸奥・出羽国府・城柵への朝貢＝特産物（毛皮・昆布など）の貢進と「饗給」（饗宴と賜禄、もと「撫慰」）（統日本紀、職員令の陸奥・出羽・越後國府の職掌規定）

秋田城跡木簡 「下秋櫻料」

新潟県並神村兔久遺跡木簡 「蟹食」

新潟市の楊邊跡木簡 「狄食」 \*山形県米沢市古志田東遺跡木簡

秋田県仙北町弘田柵跡木簡 「狄墓肆拾口」 「狄帶建一角符」

延喜式部省式「夷禄」・朝貢者への禄（アシギヌ・綿・布など）と位爵

延喜式主税寮式 出羽国 「狄禄」

一輒夷諸集団の古代国家への朝貢・・・中央（京）、国府・城柵・郡家での国司らの収穫・・互酬性による人格的公的関係の形成・・支配の実効策・・国家管理の交易

#### c 出羽国府と渡島夷

- 出羽国府の管轄範囲・・渡島・津軽・志波村・・渤海使への対応（728・786・795・・・『夷地志波村』）

職員令 出羽国府以遠、津輕以北の蝦夷・・出羽国司の管轄・・朝貢・饗給の根拠  
前史:阿倍比羅夫の「沈黙貿易」、有間浜での諸蝦夷との「大饗」・・慣行+中國法 ↑  
718 出羽国府で渡島夷と出羽蝦夷の86人が馬千（-十？）疋を朝貢、位・禄を授く（扶桑略記）

8C末・9C初 出羽国府に蝦夷が毛皮・馬・奴婢を朝貢、王臣家の使、豪富民、国司が競って買う（國家が禁止する）・・遠距離交易を要因とする社会変容の動き  
交易活動の活発化=國家の統制姿勢・・国家管理と反する交易・商業者の台頭・・東北北部社会の変動の伏線

787 渡島蝦夷が綿・铁を交易し、被や農具を造る（類聚三代格）

860年代も同じ

延喜式部省式 交易雜物 出羽国 能皮・葦鹿皮・狼犴皮→京へ、皇族・貴族の衣服・裝身具、儀式用調度品など

一蝦夷社会での生産・輸送体制、金属器などの再分配経済の恒常化・・社会構造を規

定・階層化・・奴婢

878 元慶の乱 秋田下（蝦夷〔存囚〕のほか、王臣家の使者や交易のため肅慎も住む）で矛盾爆發、さまざまな蝦夷の動き、東北北端・北海道社会の大変動へ防御性集落の出現準備 陸奥側の状況？志波城・徳丹城以後 元慶の乱時・・陸奥国から蝦夷軍派遣

### 2. 蝦夷と文字・記号のある土器・瓦－「夫」字を中心に

#### a 文字・記号のある北海道の土器

札幌市北海道大学・サクシヨコニ川遺跡 ‘82 内面黒色土師器壺「夷」竈（刻）書、9C、秋田產？ 佐伯有清氏の判読 一夷の省画（→荒木揚一郎氏の異論）、小口雅史氏が追認

札幌市K3 93 地点 五所川原產須恵器壺「人」10C中葉以前、須恵器壺「甲」？、10C 中葉以後  
余市町大川遺跡 a 土師器壺「夷」竈書、9C後半～10C初、b 土師器底部「奉」？（青木延広氏旧蔵）

須恵器壺「大刀」10C、土師器「大」？秋田城の須恵器壺と同型、「×」4点、10C 千歳市美々8遺跡 土師器「#」墨書き 10C中葉以前

千歳市末広、オサツ2、蘭越遺跡、平取町カンカン2遺跡 須恵器壺「#」五所川原產？ 10C以前

日本海側 吉町前川三線、香川6遺跡、小平町高砂遺跡2地点・・・須恵器「大」「#」などの文字・記号

道東（オホツク海側） 常呂町トコロチャシ南尾根遺跡 須恵器「#」  
東北などの「夫」字のある土器

秋田市湯ノ沢F遺跡 土師器壺「夷」竈書、10C前半

秋田県仙北町弘田柵跡 須恵器「夷」墨書き、9C前半

青森県青森市朝日山遺跡 五所川原產？須恵器壺「夫」？、刻書  
青森市野木遺跡 土師器「夷」5点、墨書き、10C初

浪岡町大沼遺跡 土師器壺「夷」竈書、10C

浪岡町野尻2遺跡 土師器「夷」墨書き、10・11C

平賀町鳥海山遺跡 須恵器壺「夷」竈書、10C

山形県遊佐郡北目長田遺跡 高台付須恵器壺「夷」墨書き、8C末葉

岩手県浄法寺町鏡振平（上外野）遺跡 須恵器壺「夷」竈書、9C

柳木県小山市八幡根遺跡 土師器壺「夷」焼成後に刻書、8・9C

山梨県・宮町狐通遺跡 土師器「夷」墨書き、9～11C

奈良市平城宮跡 須恵器壺、「夷」8C

平城京右京八条一坊 深付着の須恵器壺「夷」富山県小杉產

平城京左京三条二坊一坪東（長屋王邸）高台付須恵器壺「夷」

c 「夫」字のある瓦

岩手県水沢市沢尻城跡 平瓦

群馬県伊勢崎市上野国分寺跡 平瓦 表・裏、8 C末・9 C  
 伊勢崎市上植木庵寺 平瓦 国分寺瓦と同一筆跡か

新潟県真野町佐茂国分寺跡 平瓦  
 奈良市平城宮在京三条二坊六坪庭園跡 平瓦  
 奈良市歎延西瓦窯跡 平瓦  
 京都府木津町音ヶ谷瓦窯跡 平瓦

d 「夷」字の解釈

- ① 土器・エミシ・エビス=蝦夷・伴囚 北海道・東北に集中・偏在一蝦夷の居住地  
 (主要集落・城柵)、古代国家との交流 北海道の例・出羽国朝貢・饋給など交流の  
 産物(帶金具など)・湯ノ沢、払田柵も  
 平城宮・京の例・上京朝貢・饋宴の際の食器、漆賣納の運搬用器  
 「大」「井」字などの土器・本州在地の土器と共通の性格・信仰・祭儀→②
- ② 瓦・国分寺・墓跡・蝦夷・伴囚による造瓦労働、寺院・殿金の造営-優婆夷の略記  
 (延喜式文書からの類推) 胆沢城は?・東北北部の仏教浸透  
 土器・猿原、八幡根東・寺院と関係か・蝦夷・伴囚か
- ③ 夷の省略に非ず?・蝦夷と無関係 荒木氏・渡辺晃宏氏(北海道・東北と区別)・  
 平川南氏 「大」「夫」「樂」「奉」などと伴出する例-集落・集團での信仰・祭祀の  
 際の墨書き行為・神への祈願、疫病・穀などの祓いなど 北海道・東北北部での受  
 容?

瓦も? 五所川原產須恵器の記号

e エミシ・エビス (m=b) の表記と読み

エミシ(蝦夷)の語義 7 C~ 文化的、民族集団に対する身体的特徴による命名  
 中國の華夷(四裔)思想の摂取

「夷」・蝦夷・愛彌時(神武紀)、夷麻呂=ヒナマロ(長屋王家木簡)、夷人=エミ  
 シ? (続日本紀)・人名 \*人毛  
 時代(8~11 C)による字義・対象の変遷(荒木氏)、エミシとヒナの並存・併  
 称?

「狄」・蝦夷(続日本紀)、狄食、狄藻(木簡)=エビスマ(和名抄)  
 「夷」の楷書の例・千葉県市原市上総国分寺開運遺跡の土師器墨書「夷潛」=イジ  
 ミ・イスミ 夷の音=イ  
 京都府向日市長岡宮跡木簡 「×総国夷潛郡」909

#### [最近の関連する文献]

- 戸根貴之 「古代文字資料にみる蝦夷」『古代』106、1999  
 小池浩平 「上毛野氏及び上毛野-上野国と蝦夷政策との関連(2)」『群馬県立歴史博  
 物館紀要』20、1999  
 鈴木靖民 「擦文期の北海道と東北化北部の交流」『国史学』169、1999  
 荒木福一郎 「「夫」字(墨)書研究の現状と課題」『考古学へのアクセス』2000

## 「夫」字箇（墨）書について

法政大学

小口 雅史

### ○主要研究史

佐伯有清「平城宮跡からも「夫」字鉢土器」北海道新聞 1985/07/27

関口 明「北海道式古墳と復縁復夷」古代文化 37・7 1985/07

佐伯有清「劍字土器「夫」の意義」『サクショコトニ川遺跡』本文編 1986/03

荒木謙一郎「誰（墨）書土器「夫」字の考察」考古学の世界 6 1990/04

佐伯有清「淡岡・大沼遺跡の劍字土器 関係示す文字「夫」」東奥日報 1990/07/27

佐伯有清「土器に刻まれた「夫」の字」北海道新聞 1990/08/01

宮 宏明「化外の域における鈴鹿金具出土の意義」北奥地文化 20 1990/11

鎌本謙民「複雑な交流こそ注目」読売新聞夕刊 1992/12/07

小口雅史「「夫」字箇（墨）書について」『海峡をつなぐ日本史』 1993/07 三省堂

佐伯有清「「夫」字記載の出土遺物」『1993年度大川遺跡発掘調査概報』1994/03

小口雅史「古代・中世における北方世界の史的展開」『過渡的景觀と交流の文化論』1995/03

玉田芳英「統計土器の研究」『文化財論叢』II 1995/09 同朋舎出版

熊田亮介「秋田城と秋田郡」秋田市史研究 4 1995/09

鷹邊晃宏「歌姫百瓦衆等出土の施書き瓦」奈良国立文化財研究所年報 1995 1996/03

鎌本謙民「古代復夷の世界と交流」『古代王權と交流』I 1996/09 名著出版

山本晋也「ロクロ士師器と北海道」国学院大学考古学資料紀要 13 1997/02

小口雅史「青森市野木遺跡出土の古代墨書き土器」市史研究あおもり 2 1999/03

小池治平「上毛野氏及び上野毛一上野国地域と復夷政策との関連(2)」群馬県立歴史博物館紀要 20 1999

戸根聰之「古代文字資料にみる複夷」古代 106 1999/03

鎌本謙民「熊文期の北海道と東北北部の交流」国史学 169 1999/10

荒木謙一郎「「夫」字箇（墨）書研究の現状と課題」『考古学へのアクセス』 2000/01

### 「夷」説

※佐伯一關口 1985 番給の場で使用されたものが持ち込まれた

※小口 1993 『日本書紀』北日本の使用例

※佐伯 1994 朝賀に参列した復夷の造瓦負担に關係

※小口 1995 工人集団。湯ノ沢Fは「夫」の例

※鈴木 1996 朝貢・番給、造瓦労働

※小池 1999 樋戸・俘囚移配との関係

※鈴木 1999 国分寺や平城京のものは貢進主としての倭婆夷を示す

### 「夷」以外の可能性

※荒木 1990 奉・奏・樂・奏

※小口 1993 歌姫については「夫」などとの関係に注意

※小口 1995 歌姫については符号と見なす

※渡辺 1996 歌姫について、奏・夫・大との共伴関係

※山本 1997 奉・奏・樂の可能性を棄てきれない

※戸根 1999 記号説

### ○古代の書体

古文書の類では書体の時代特性、「はやりすたり」有

『日本書紀』北日本の筆類

### ○略字・記号の可能性

「蛭夷」と「夷」との文献用例との違い(荒木 2000)については、箇書・墨書の場合、正史の例をそのまま適用できない。

遺物の性質

共伴遺物の特性

遺跡の内容

共伴文字・類例のデータベース化(青森県史に期待)



## 「夷」文字の謎

昭和五十七（一九八二）年暮れ、札幌市北海道大学構内のサクシュコトニ川遺跡から、「夷」という習慣のない文字が刻まれている土器の破片が発見された。翌年、それを「夷」と読む説が發表されると、出土地が北海道であつただけに、蝦夷問題と密接にかかわる資料として、にわかに学界の脚光を浴びることとなつた。これまで解説不明として放置されていた土器の中にも、この文字があることが再発見されたり、またあらたに発掘されたりして、現在ではかなりの量の出土が知られている。なかでも青森県では、平賀町<sup>ひらがまち</sup>鳥海山遺跡、青森市朝日山遺跡、浪岡町大沼遺跡、青森市野木<sup>のぎ</sup>遺跡などで、その墨書土器が発掘されており、全国的にみてもその数はトップクラスである。とくに野木遺跡では、複数まとまって出土しており注目される。

この文字をすべて「夷」と読むことに異論がないわけではない。たしかに記号としてのものもありそうである。しかし、院政期に書写された北野神社本『日本書紀』の筆法などからみて、「夷」字の中には「夷」字が含まれている可能性も高いであろう。

ただこれら県内の出土例の多くは、地元産の土器に書かれたものであつて、中央から与えられたものではない。となると、みずからこの字を書いたことになるが、差別意識の強い文字をなぞみずから書いたのであらうか。エミシ・エゾはアイヌ語起源であるといわれているが、あるいはこの文字は、逆に中央から伝えられ、その意味を正確に理解しないまま書かれたものなのであらうか。

『日本三代実録』には、「津軽が賊に同すれば、大兵といえども制しがたい」「津軽の夷俘<sup>いづら</sup>はその党種多く、幾千人かわからぬ。天性勇壮で常に習戦を事としている。もし敵にまわればその勢いは止めがたい」といった記述がみられる。実際には津軽のエミシたちは分裂していたらしく、あるものは賊に味方して乱を拡大するのに大きな力となつた。逆に、津軽エミシの中にも三〇〇〇の渡島のエミシとともに羽田の官軍に味方するものがあり、その勢力が「賊氣<sup>賊氣</sup>」を衰えさせるのに大きな力となつともいわれている。阿倍比羅夫以来、「賊を以て賊を伐つ」「夷を以て夷を撃つ」のは、強固な部族連合や国家を形成してまでも中央政府に抵抗しようとはしない、政治的に未熟なエミシ集団を討つ、征夷戦の常道であったが、今回も官軍に協力した津軽から渡島方面のエミシのはなした役割は大きかつた。

その後、寛平五（八九三）年にも、元慶の乱の後遺症から、渡島エミシと他のエミシとの間でもめごとがあつたことが伝えられているが、これを最後に、「渡島」の名は歴史から消えていく。東北経営の完了とともに、渡島の本州部分は津軽にとりこまれ、北海道と深い関係をもつ方面は、古代国家と隔離することとなる。一方、こうした北奥の実力者としての津軽のエミシの伝統は、中世津軽安藤氏に引き継がれていくこととなるのである。なお青森県の地は、延長五（九二七）年成立の『延喜式』の段階になつてもまだ、郡制に編入されてはいない。



県内出土の「夷」文字土器 左は朝日山(3)遺跡出土、右は野木遺跡出土。

## 札幌市サクシュコトニ川遺跡の「夫」について

七飯町教育委員会 横山 英介

1 発見・「夷」文字説と解釈・そして…

発 見 —— 発掘調査 1981年～1982年、報告書 1986年

発掘調査主体者 北大埋蔵文化財調査室

遺跡 桜文時代中期（西暦9世紀半～10世紀前葉）の集落跡

「夷」文字説と解釈 —— 1983年2月当時北大文学部日本古代史教授佐伯有清氏によって提出される。（別添1）『北大時報』2, No. 347(1983)

そしで… ① 土器（土器部・須恵器）・平瓦にハラ書き、墨書きされた同型態資料が本州・北海道に広く分布していることが判明した（図1）。  
 ② とくに、文字資料がみられなかつた古代北海道で、認識のきっかけとなった。

2 坪17の特徴と「夷」（図2、図3-6）

① 法量：口径17.5cm、器高6.5cm。

② ロクロ成形：系彻底。内面黒色処理。

③ 夷：部体・外面に「夷」とハラ刻み、高さ17.2mm。

④ 個体数：坪類は113個体。本資料は搬入品の可能性が強い。

そして、原産地は秋田城周辺域と推定される（図6）。

土器の形態割組成比



3 ムラでの取り扱いはどうであったか

① 風窓跡：竪穴住居5、土壙6、集石7、燒土・炭化物集積跡142（図7）。

② 破片数9。複数の燒土・炭化物集積跡に分布。

炭化物マウンドに口縁部・体部破片4、焼土18に体部破片2、同28に体部破片1、同30に体部～底部破片1。その他に口縁部破片1が分布していた（図7）。

③ 破片分布は、他の器物同様、複数の炭化物集積場に複数された状況を示していた。

## 〔表紙解説〕

北大構内の悪治費西側のシャブランコニ用とセロシベツ川の合流地点の道路（遠野新道跡）の駁六辻跡から出土化した未粒などとともに出土した土器片に文字が彫まれていた（表紙真写参照）。実物の2倍強に拡大されている。

この土器片は、土器部と両端のものであって、これに対応している「夷」の文字らしきものについて、北大埋蔵文化財調査室では、東北地方出土の土器部に「夷」と刻まれているものもあることから、漢字から書かれた一樣の記号ではないかとする説、あるいは何らかの漢字ではないかという意見がされていた。

最近、私は調査室から、この土器片の翻写の実物大の写真を示されて、これが何という字のかの見解を尋ねられた。文字土器片の写真を見て私の直感は、「夷」の字は、「夷」の字ではないかということであった。

そこで、郵便に手本もある土器体絵をひもといて、「夷」の字の真字体は「夷」の字に類似するものが何をどうか調べてみたところ、「夷」という字が目に飛び込んできた。難点は、土器片の「夷」には、三面目の「夷」に両端部分がないことであるが、土器片に刻まれている字の「夷」の部分の両端面所も、かなり苦心して刻んだ痕跡があるため、三面目の「夷」を再現させるのを怠って刻んだ可能性は大きいように思われる。この種の刻字は看面される場合が多いから、「夷」が「夷」の字であって、「夷」の具体字とみなすことは、けっして的にはそれでないであろう。

「夷」か「夷」、すなはち「夷」の字ならぬ、いわば「夷」とは、何を意象するのであるか。実は、「夷」は「假夷」と同義語であって、しかも「假夷」を、單に「夷」と表記するようになるのは、『日本書紀』『日本本紀』など日本古代の文献史料を精査することによって、720年代以前のことになると書紀本から既にかけてであったことが知られる。

「夷夷」か「夷」へと少しが化の時期ならびに「夷」の字がひろく使用される時代と、この土器片の年代ととはほぼ一致し、この文字土器発見の北海道古代史上における意義は前面的なものといえるであろう。

この土器片の「夷」の字を刻んだ者は誰か。9世紀に東北北部に派遣された律令官寅か、在地の「假夷」の族長か、こうした問題の解明は、今後の大きな課題となる。「夷」の字が、たとえ「夷」の字でなくとも、北海道における文字の記録がおよそ1,000年前にさかのぼり、しかもこの資料が、わが北大構内から発見されたことの意義は、まことに大きい。

1983.2. (文学部教授 佐伯 有清 日本書紀)

別添1



図1 「夫」出土遺跡の分布(横山1998に追加)  
(第6回東日本埋蔵文化財研究会シンポジウム資料 1997より作図)

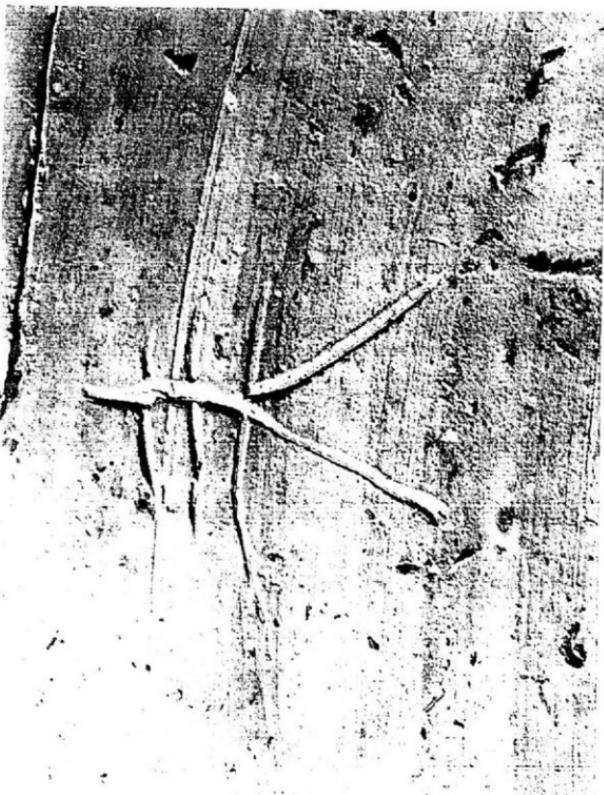


図2

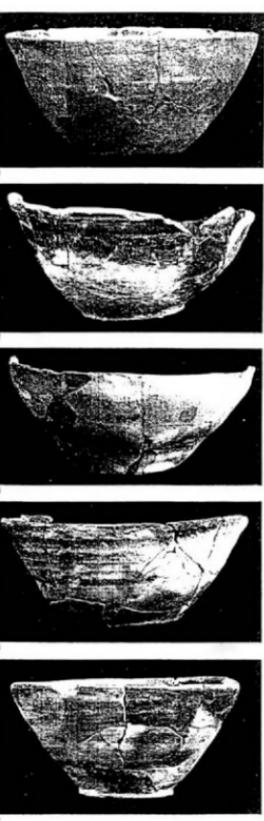
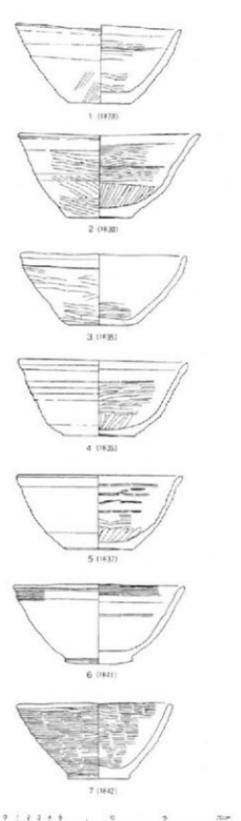
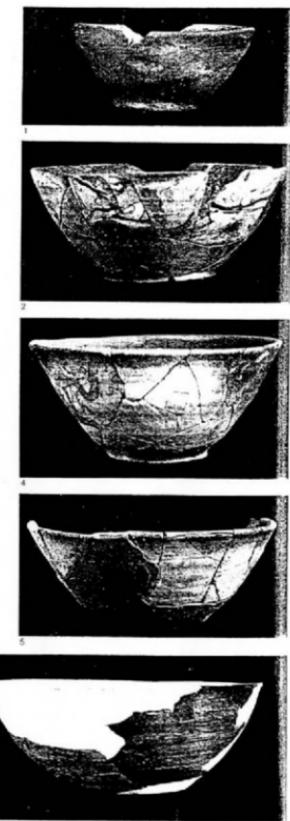
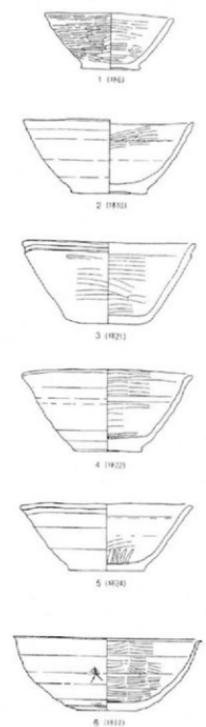


図 3

図 4

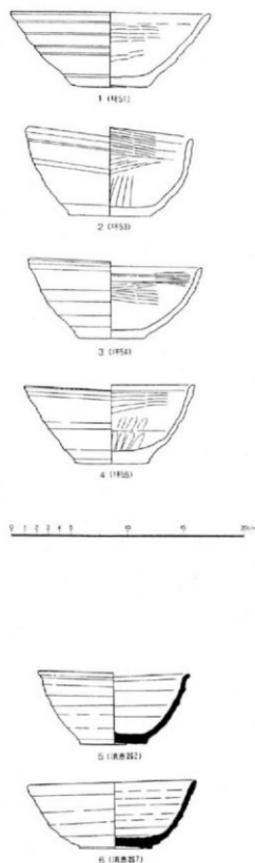


図 5

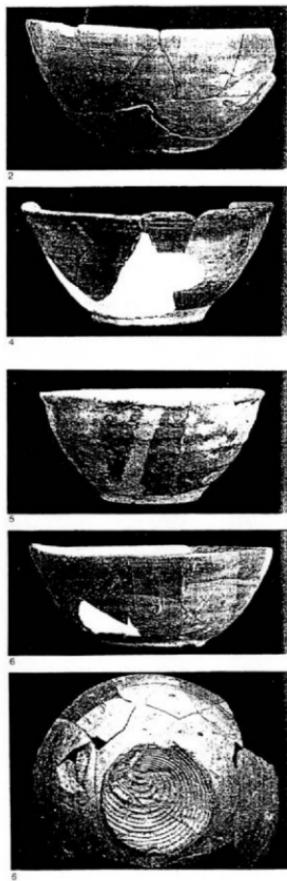
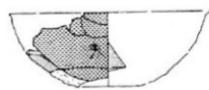
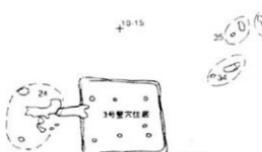


図 6



■ 残瓦等アワンド  
□ 土壌  
□ 無化物質



## 野木遺跡から出土した墨書土器「夫」の解釈をめぐって

浪岡町史編纂室 工藤 清泰

### 1) 北東・北海道における考古学的な成果

- 1 文字資料の出現は9世紀以降であり、それ以前には存在しない。
- 2 考古資料として、墨書・刻書の認められる土器は、ロクロ土器が生産され始めてからである。もちろん、須恵器生産も対応している。
- 3 墨書の認められる器種は、現在のところロクロ土器（須恵器）环・皿に限られ、盤などに付けられることはない。
- 4 刻書の認められる器種は、須恵器大盤・中盤・鉢・長頸壺・短頸壺・环・皿であり、土師器の环・皿にも認められる。
- 5 五所川原須恵器の特徴の一つは、刻書・ヘラ記号の多さにある。

### 2) 北東・北海道における墨書・刻書（記号）の様相

- 1 文字として認識できる資料

#### ア) 復数文字

环一口（玉清水Ⅲ 土師器环 墨）

#### イ) 二文字

大佛（鳥海山 須恵器皿 研 刻）、大井（李平下安原 須恵器皿 刻、羽黒平1 須恵器皿口壺 刻）、[大万?]（八幡 須恵器長頸壺 刻）、十万（松元 土師器环 墨、近野 土師器环 墨）

#### ウ) 単数文字

「あり」……有（浪岡城 須恵器鉢 刻）、又（浪岡城 須恵器鉢 刻、野木 須恵器 鉢 刻）

「いにしえ」……古（持子沢C窯 須恵器皿 刻、浪岡城 須恵器环 刻）

「いる」……入（山元2 須恵器長頸壺 刻、山元3 長頸壺 刻 他）

「う」……得（豊岡2 土師器内黒环 墨）

「おほ」……凡チャ（中野平 土師器环 墨 他）、大（蜜沢 土師器环 墨、田面木 土師器环 墨、大川 須恵器环 墨 他、羽黒平1 須恵器环 刻、鰐川4 須恵器环 刻 刻、山本 須恵器环 刻、源常平 須恵器皿 刻、山元3 須恵器長頸壺 刻、他多数）、大1（松山 須恵器鉢 刻）

「かみ」……神（持子沢B窯 須恵器皿 刻2点）、上（蜜沢 土師器环 墨）

「かたな」……大刀（大川 須恵器長頸壺 刻）、一刀（持子沢C須恵器皿 長頸壺 刻 大走須恵器皿 長頸壺 刻）

「き」……木（松山寺 須恵器長頸壺 刻、鰐川4 土師器环 刻）

「こころざし」……志？（野尻2 土師器内黒环 墨）

「さち」……幸（石上神社 土師器环 墨、免茶沢1 須恵器皿 刻）

「た」……田（源常平 土師器环 墨、野尻2 土師器内黒环 墨、根城 土師器内黒环 墨、大野平 土師器环 刻、鰐川4 須恵器环 刻 線刻付、鰐川3 須恵器环 刻 他）、太（大走須恵器皿 須恵器皿 刻、野尻1 須恵器皿 刻、他）

「ちち」……父（山本 須恵器長頸壺 刻、笠沢 須恵器皿 刻、他）

「ひさし」……小（野尻2 土師器环 皿5点 墨）

「てら」……寺（羅越 土師器环 墨、石上神社 土師器环 墨）

「とを」……十（茶罈館 土師器环 墨、笠沢 土師器环 墨、李平下安原 土師器环 墨、羽黒平1 土師器环 墨、大川 土師器环 墨、山本 須恵器环 刻、山元3 須恵器环 墓、源常平 刻、源常平 須恵器皿 刻、他）

「なか」……中（岩ノ沢平 土師器环 墓）

「はる」……春（浪岡城 須恵器皿 刻）

「ひと」……人（浪岡城 須恵器長頸壺 刻、札幌K39 遺跡 須恵器長頸壺 刻、他）

「ま」……真（大平 土師器环 墓）

「め」……女（野尻1 須恵器長頸壺 刻）

「まる」……丸（下志窯 土師器环 墓、場合III 土師器环 墓）

「やまと」……山（相模岡前館 土師器环 墓、羽黒平1 須恵器皿 刻、浪岡城 須恵器环 刻、鰐川3 須恵器环 刻、他）

「よろづ」……万（茶罈館 土師器环 墓、持子沢C須恵器皿 須恵器長頸壺 刻 大走須恵器皿 長頸壺 刻） 参考 大万（福島県 大戸須恵器皿資料）

「み」……井（野尻3 土師器内黒环3点 墓、源常平 須恵器环 刻、大平 須恵器环 刻、野木 須恵器环 刻、鰐川3 土師器环 刻、他）

### 2) 記号や数値と認識されるヘラ書き（墨書）、主要遺跡のみ

遺跡名	墨書	刻書
山元(2)	丨卅八六六六 ×ト々々止止々   +一+ア	
山元(3)	III ト々+土廿八ト×ヰ ト々	
鰐川(4)	口少六ニ王V+三 △+△	
鰐川(12)	三△IIX王文一△	
鰐川(3)	ノ+トロリサナヰ ○+	
羽黒平(1)	××日△×上冊セト 野尻(1)	半止二平曲三〇半 キ

野尻(2)	/田
野尻(3)	トX
野尻(4)	牛十田
山本	X A + I III A 井 井
松元	专 美 ハ リ + 二
杉の沢	ハ X X 二
源常平	田 # II - + X
浪岡城跡	W W V V N A A + A + X III S W W A A + 山 + 二 II III 今 三 人 田 口 六 八
	二
犬走須恵器窯	\ III + #
砂田D須恵器窯	II III
水木館	+ II W II + 木 * T + T H + 米 # 土
野木	X 三 # * V V X / I X X * V V + # 井 + V + I + 十 六 木 + 木 土 丰 大

3 平川南氏の中間報告（1999.2.25）で指摘された2点の問題に即して考えてみる。

①「土器に文字を記すことは何か」という本来的な意義

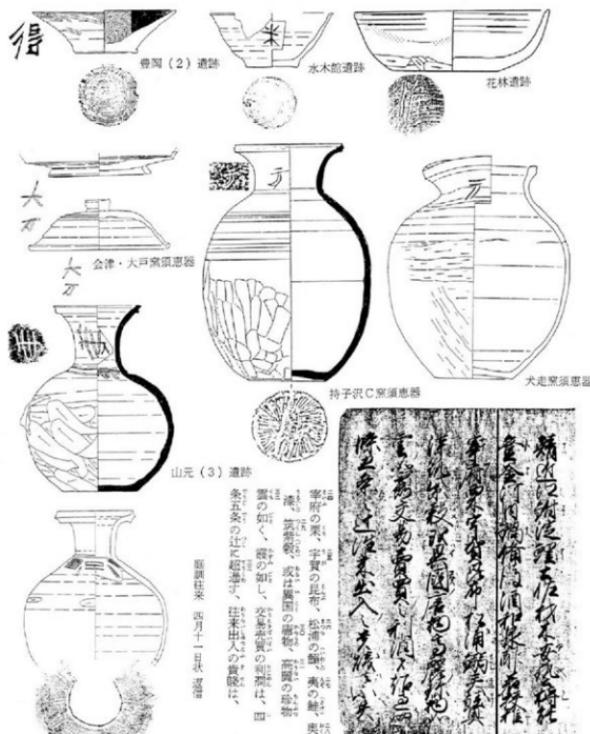
文字や記号の付けられた器がマジカルな要素を内包すると見た場合、刻書土器は、最初から意図してマジカルな器として製作され、墨書き器は、日常会話から非日常（例えば供物など）の容器に変化した器と考えることができる。つまり、五所川原須恵器は、そのほとんどに刻書が認められるここから、最初から祭祀的使用を想定して製作された。

②日本列島全体の墨書き・刻書き器の流れの中でとらえた場合

北奥・北海道の墨書き・刻書きの資料は、文字については吉祥的な意味を内包した使用が多く、文字認識される刻書きも同様である。刻書きの多さ（初期の五所川原の須恵器に関しては、90%近い比率で付けられている）は、記号も含めて供給先に対する器の象徴性を示す意味が強いのではないか。文字認識よりも文字・記号の象徴性を優先する社会構造。

#### 4まとめ

野木遺跡などから出土している「夷」字に関しては、「夷」と認識していたとは思われない。ただし、「えびす」という吉祥文字に関しては、可能性が存在する。



川崎達助(未発表資料・転載不可)